

聖書：ヨハネの黙示録 3：1～6

説教題：白い衣を着て

日時：2021年1月3日（朝拝）

アジアにある7つの教会に対するイエス・キリストのメッセージの第5番目、サルディスの教会へのメッセージを見て行きます。このサルディスは前回のティアテイヤから南東へ50キロメートルほどのところにある町で、今日はサリフリという町の近くのサルトという村に当たります。ここはかつてのリュディア王国の首都でした。アッシリア帝国崩壊後の紀元前7世紀から6世紀にかけて、世界は四王国分立の時代となりますが、その四王国とはバビロン、メディア、エジプト、そしてこのリュディアでした。リュディアはヨハネの黙示録が宛てられた小アジア、今日のトルコ西部にあった王国です。ちなみにリュディアは、前回も触れた使徒の働き16章に出て来る紫布商人のルデヤ、新改訳2017ではリディアと訳されている言葉と同じです。ルデヤとはリュディアの女の人という意味です。そのリュディアの王都があったのがこのサルディスでした。リュディアはその後、バビロンを打ち破ってイスラエルにエルサレム帰還許可を出したあのペルシャの王キュロスに敗れてペルシャ領となります。そのペルシャ帝国でもサルディスは主要な都市であり続けたようですが、ローマの時代にはその栄光は過去のものとなっていました。しかしかつて王の都だった町として人々はプライドを持ち、また交通の要所としてなお繁栄していたようです。

そんな町にある教会への主のメッセージは最初から厳しいものでした。これまでの教会ではまずその教会の優れた点を取り上げて主は称賛されましたが、サルディスにはそれがありません。「わたしはあなたの行いを知っている」と語り始めて、まず言われたのが「あなたは死んでいる！」でした。「生きているとは名ばかり」とありますが、「名」は名声とか評判を意味します。つまりサルディス教会は生きている教会という評判があったのです。先にこの町は偉大な過去を持つ町として人々は誇りを持っていたと述べました。そういう町に住むクリスチャンたちも自分たちの教会を誇りに思い、名のある教会、生きている教会と自負していたようです。また他からもそう思われていたようです。このサルディスへの手紙を見ると、これまで出て来た迫害のことは記されていませんし、偽りの教えのことも述べられていません。バラムの教え、ニコライ派の教え、イゼベルの活動等もありません。そこでここを

訪れて、その礼拝に出席し、そこの人々に触れる人たちは思うのです。何と恵まれて、平和で、落ち着いて、祝された教会か！さすが名のある有名な教会だ！ところがイエス様は「実は死んでいる！」と言われます。ドキッとする言葉です。生きているとは名ばかりで、実体はない名目だけの教会である！と。いかに人の評価と神の評価は異なるかを改めて教えられるのではないのでしょうか。「人はうわべを見るが、主は心を見る」（サムエル記第一 16 章 7 節）。

具体的にこの教会にはどんな問題があったのでしょうか。2 節でサルディスの教会は「目を覚まさない」と言われています。つまり霊的に眠りこけた状態にあったということです。色々な活動はしていたかもしれませんが。豊かな町にある豊かな教会として経済的に不足することもなかったかもしれません。争いごともなく平和な日々を過ごしていた。しかし主が見ると、それはまどろんだ状態にあるだけであった。どういうことなのでしょう。ある人はこう考えます。これまで見て来た通り、当時はローマ皇帝ドミティアヌスによるキリスト教迫害の時代であり、またこの地方の教会は異教社会に囲まれて様々な戦いがあった。そんな中、主に忠実に従おうとする教会には様々な迫害や苦しみが起こって来たことが述べられた。しかしこのサルディスの教会にはそれがない。それは彼らが妥協の生活を送っていたからではないか。この世に迎合し、この世に同化し、いつしかこの世と何も変わらない教会になっていた。だから衝突がなく、平和だった。しかしそれは偽りの平和であったということです。目を覚ましているよりは、眠り込み、霊的に無感覚な状態になっていた。そんな教会だからサタンもあえて攻撃する必要がなかったと。

あるいはもう一つの手がかりは、後で少し詳しく触れますが、4 節から、この教会の人々は罪をそのままにしている人たちだったということです。4 節の表現を用いれば、自分たちの衣を汚したままにしていた。その罪とはこれまで見て来た異教の偶像礼拝に参加するという妥協の罪を含むかもしれませんが、そのことがここでは特には述べられていませんので、もっと広く罪全般を考える方が良いという見方です。彼らは罪を犯しても、そのまま放置していた。そのことをもはや気にしない生活。どんどん衣が汚れるままにしていた。人々からは名のある教会として見られていた一方、主が見ると中身はなく、死人同然の人々が集まっている教会。それがサルディスの教会でした。

果たしてこんな教会に望みはあるのでしょうか。しかし主はそんな教会にもメッセージを語って行かれます。主はまず「目を覚まさない」と言われます。ある人は1節で「死んでいる」と言われたのに、これは矛盾するのではないかと考えます。死んだ人は、目を覚ませと言われても、そうできないのではないかと。しかしこの両者を組み合わせて考えれば、1節の「死んでいる」は絶対的な意味ではないと考えられます。単刀直入に「死んでいる」と言われましたが、その正確な意味はほぼ死んでいるような状態にあるということです。しかしまだ命を回復できるわずかな可能性があるので、「目を覚ませ」と言われている。次の「死にかけている残りの者たちを力づけなさい」という言葉も、そのことを示しています。「残りの者たち」という部分を新改訳は人として解釈していますが、その場合、死にかけている人々がさらに他の死にかけている人々を力づけるように、と言われていることとなります。しかしこの表現は、人ではなく、サルディス教会にわずかながら残っているいのちの可能性を指していると思われれます。その残り火をかきたてよ！ということです。死ぬままにしないで、次の瞬間には死んでしまうかもしれないそのいのちの炎が力を持つようにせよ！と。2節後半は、人々の目にサルディス教会は立派な教会、完了したと見られていましたが主の前ではそうでないということを改めて語るものです。だからただ名を持っているということで満足するのではなく、目を覚まし、残り火をかきたてて、主の前に完了したと評価されるものとなるように取り組み！ということでしょう。

具体的にどうすべきかが3節にあります。「だから、どのように受け、聞いたのか思い起こし、それを守り、悔い改めなさい。」これは一つ目のエペソ教会に語られたメッセージとよく似ています。2章4～5節に記されていましたが、エペソ教会は初めの状態から落ちていました。「だから、どこから落ちたのか思い起こし、悔い改めて初めの行いをしなさい」と言われました。サルディス教会も同じです。以前は良かったのです。福音に生きていたのです。霊的に起きて、目を覚まして歩んでいました。あの最初の時に福音をどのように受け、聞いたのを思い起こし、そこにもう一度立ち戻れ！そしてあの時に主に感謝して、主の言葉を守り行ったように、それを守る生活へと立ち返り、悔い改めよ！生活の方向転換をせよ！と言われています。

そしてここで合わせて考慮に入れるべきは、1節最初の主の自己紹介の言葉です。

それぞれの教会へのメッセージの最初には、まず主がどんな方であるかが述べられていて、それはその教会へのメッセージと深く関わっていることをこれまでも見て来ました。またそのお姿は1章の主のお姿から取られていることも見て来ました。7つの星は1章16節に出ていて、それは1章20節で7つの教会の御使いたちを指すと述べられていました。主はこの天的な存在を通して教会を守り導いておられます。また7つの御霊という表現は1章4節に出て来ました。「7」は完全数を指し、これは御霊の完全な働き、十分に豊かな力を意味しています。サルデイスの教会員は今、霊的に死にそうな状態にありましたが、そんな彼らが再び元の命ある状態に戻ることはできるのかと思うかもしれません。しかしイエス様は神の7つの御霊と7つの星を持つお方として死人同然の彼らに命を吹き込み、いのちに満ちる者たちとすることができる。その御霊と天的な助けの力に信頼して、ここで言われていることに取り組むということです。御言葉とともに働く聖霊の力に信頼し、期待し、その促しに従って、命を回復する道に歩め！ということです。

もしそうしないなら、と3節後半に警告も語られます。「目を覚まさないなら、わたしは盗人のように来る。わたしがいつあなたのところに来るか、あなたには決して分からない。」 同じようなことがエペソ教会に対しても2章5節でこう言われていました。「そうせず、悔い改めないなら、わたしはあなたのところに行って、あなたの燭台をその場所から取り除く。」 それと同じように教会の存続に関わるさばきが臨むかもしれない。その日は突然来る。だからこの警告に聞いて正しい道に立ち返れ！とされています。

最後に4～6節にかけて励ましと約束が語られています。4節に「しかし、サルデイスには、わずかだが、その衣を汚さなかった者たちがいる」とあります。わずかですが、主に忠実な者たちもいました。その彼らについて「彼らは白い衣を着て、わたしとともに歩む」と言われています。これは未来時制で語られていますので、やがての将来、天の御国で与えられる祝福のことを語っているのでしょうか。この人々は衣を汚さなかったと言われています。これはどういう意味でしょうか。衣を汚すとは、罪を犯すことと関係していると思われそうですが、彼らは罪を犯さなかったということでしょうか。完全な人だったということでしょうか。もちろんそうではありません。私たちはイエス・キリストを信じて義の衣を着せられるというイメージのことが聖書に言われています。イエス・キリストと結ばれて、イエス・キリストの

義が私たちに転嫁されるということです。こうして私たちは初めて神に受け入れられます。その衣をサルデイスのわずかな人々は汚さなかったと言われていました。これは信仰を持った後、一度も罪を犯さなかったという意味ではなく、罪を犯しても汚したままにできなかったということでしょう。その方法は何でしょうか。ヨハネの手紙第一 1 章 9 節：「もし私たちが自分の罪を告白するなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、私たちをすべての不義からきよめてくださいます。」 逆に言えば、多くの人はこのことをせず、汚したままにしていたのです。きれいな服を着て最初の内は、汚れるとすごく気になるものです。急いでその染みを取り、きれいな状態を保とうとします。しかし次第に汚れが増えて行くと起こりがちなことは、何もなくなるということではないでしょうか。そのままにする。さらに汚れるようなことがあっても、もうどうでもいいや、とほぼ無感覚。しかしサルデイスのあるクリスチャンたちは、その衣を汚さなかった。私たちはキリストを信じて義の衣をいただいたら、後は無頓着に歩んで良いとは言われていません。エペソ人への手紙 4 章 1 節：「あなたがたは、召されたその召しにふさわしく歩みなさい。」 この世にある限り、罪を犯さなくなることはありませんが、罪を犯すたびごとに福音に立ち返り、キリストの十字架のもとで告白し、赦しと聖めをいただいて歩む。そうして衣を汚さないように歩む。そうする人にやがて白い衣が与えられます。これは完全な義の衣であり、二度と罪に汚されることのない衣です。天国にこそ用意されている衣です。その衣を着てイエス様とともに歩む。心も思いもイエス様と一つに調和している者として共に歩む。この祝福にあずかるのは、彼らがそれにふさわしい者たちだからであるとあります。主は罪を犯しても、先に述べたようにして衣を汚さないようにして歩む者たちを、ふさわしい者たちと呼んでくださるのです。

そしてイエス様がこのことを述べたポイントは、サルデイスの中のわずかな人々はこの祝福を受けるが、他の多くの教会員はこれにはあずかれないと宣言することではありません。イエス様の言いたいことは、サルデイスの教会の中にもこのように歩んでいる人たちがわずかながらいる。その彼らはこの祝福を受ける。だからその彼らを見倣い、彼らのように歩みなさいと励ますことです。ですから 5 節でその約束が繰り返されています。勝利を得る者、すなわちこのイエス様の言葉に従ってこの課題を克服する者すべてに同じ祝福が約束されています。その人はこのように白い衣を着せられる。そしてその人の名をイエス様はいのちの書から決して消しはしない。むしろその名を「わたしの父の御前と御使いたちの前で言い表す」とイエ

ス様は言われます。今日の箇所では「名」という言葉が一つのキーワードとなっていました。サルディスの教会の問題は、地上における名はあるが実がないということでした。生きていると地上では言われているのに、やがての天に入ろうとする時、いのちの書にその名がないということは厳粛なことです。しかしイエス様の言葉に従って歩む者たちは、天のいのちの書にしっかり名が記されていることを発見することになるのです。イエス様はその日にいのちを本当に持っている者として、その名を父なる神と御使いの前で言い表してくださり、天の御国に迎え入れてくださるのです。

私たちはどうでしょうか。名ばかりのクリスチャンということはないでしょうか。イエス様は最後に「耳のある者は、御霊が諸教会に告げることを聞きなさい」と言っています。ですから聞く耳を持つ者たちとして、私たちはこのメッセージを自らに当てはめ、適用すべきです。キリストを信じて義の衣をいただいた私たち。しかし日々願わずして罪を犯す私たち。今日の御言葉から受けるチャレンジは衣を汚したままにしないということです。その状態を放置しない。そのままにしたらどんどん衣は汚れるだけです。その内、何も感じない霊的無感覚、死の状態に至ります。もし今日のメッセージが少しでも自分に当てはまると思うなら、私たちも福音に立ち返り、主の恵みと聖霊の力に信頼する歩みへ進みたいと思います。主の御前で罪を告白し、赦しと聖めを新しくいただいて、衣を汚さないように保つ歩みへと。サルディス教会にはそのように歩む人々がわずかにいて、その人々を見倣って歩むようにと勧められたように、私たちも私たちの周りでそのように歩む兄弟姉妹に目を留めて励ましを受け、自らもそのように歩む者でありたいと思います。そのように取り組む人を主はふさわしいと言って下さり、やがて白い衣を着る者、そして天の御国でご自身とともに歩む者としてくださいます。いのちの書に名が記されている、真実な信仰者として天の御国に導き入れてくださいます。その日に向かってこのキリストの言葉に従う幸いな一年の歩みを、また私たちのその取り組みが他の兄弟姉妹の助けとなり、励ましとして用いられることも願いつつ、この新しい年の歩みを導かれて行きたいと思います。